方向

第一三五号　一九九一年九月一〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

如来知見の宝蔵

—法華経巡礼　64—

1991 8 29　原田憲雄

4-17. さて、世尊よ、その貧しい男は、そのときこのような宣言を聞いて、奇異にも不思議にも思い、こう考えます「おもいがけずこの黄金・財産・穀物・土蔵・穀倉がわたしのものとなった」と。

atha khalu bhagavan sa daridra-purusas tasmin samaya imam evam-rūpam ghoṣam śrutv āścaryādbhuta-prāpto bhaved evam ca vicintayet sahasaiva mayedam eva tāvad dhiraṇya-suvarṇa-dhana-dhānya-kośa-koṣṭāgāram pratilabdham iti //

4-18. このように、世尊よ、わたしたちは如来の息子にひとしい者であり、如来もまた、「きみたちはわたしの息子だ」と、あの長者のようにいわれます。わたしたちは、世尊よ、三つの苦しみに悩まされていました。三つの苦しみとは何かというと、好ましくないものから受ける苦しみと、移り変わりの苦しみと、好ましいものが壊れる苦しみです。わたしたちは輪廻のなかで信の薄い者でした。だからわたしたちは、世尊に、糞尿の堆積のような多くの下等な法をよくよく考えよと、言われたのです。わたしたちはそれらに勤め、熱中し、励み、涅槃だけを、わたしたちは、世尊よ、日給を得ようとする者のように、捜し求めていました。わたしたちは、涅槃を得たことによって満足し、如来の傍にいながら、それらの法に勤め、熱中し、

励み、多くのものを得たと考えていたのです。如来はわたしたちが信の薄い者であることを知り、それで世尊はわたしたちをほっておき、接触せず、「如来の知見の宝蔵がきみたちのものとなるだろう」とは語られなかったのです。世尊はまた、わたしたちを、巧みな方便により、如来の知見の宝蔵の相続人に定められましたが、わたしたちは、世尊よ、それを望むこともなく、こう考えるのです「わたしたちにとって大切なことは、わたしたちが如来の傍で、日給をもらうように、涅槃を得ることだ」と。

evaṃ eva bhagavan vayaṃ tathāgatasya putra-pratirūpakās tathāgataś cāsmākaṃ evaṃ vadati putrā mama yūyam iti yathā sa gṛhapatiḥ/ vayaṃ ca bhagavaṃs tisṛbhir duḥkhatābhiḥ saṃpīḍitā abhūma/ katamābhis tisṛbhir yad uta duḥkha-duḥkhatayā saṃskāra-duḥkhatayā vipariṇāma-duḥkhatayā ca samsāre ca hīnādhimuktikāḥ/ tato vayaṃ bhagavatā bahūn dharmān pratyavarān saṃkāra-dhāna-sadṛśān anuvicintayitāḥ/ teṣu c'āsma prayuktā ghaṭamānā vyāyacchamānā nirvāṇa-mātraṃ ca vayaṃ bhagavan divasa-mudrām iva paryeṣamāṇā mārgāmaḥ / tena ca vayaṃ bhagavan nirvāṇena pratirabdhena tuṣṭā bhavāmo bahu ca labdham iti manyāmahe tathāgatasyāntikād eṣu dharmeṣv abhiyuktā ghaṭitvā vyāyamitvā / prajānāti ca tathāgato'smākaṃ hīnādhimuktikatāṃ tataś ca bhagavān asmān upekṣate na saṃbhinatti n'ācaṣṭe yo'yaṃ tathāgatasya jñāna-kośa eṣa eva yusmākaṃ bhaviṣyatīti / bhagavāṃś cāsmākam upāya-kauśalyenāsmiṃs tathāgata-jñāna-kośe dāyādān saṃsthāpayati / niḥspṛhāś ca vayaṃ bhagavaṃs tata evaṃ jānīma etad evāsmākaṃ bahukaraṃ yad vayaṃ tathāgatasyāntikād divasa-mudram

iva nirvāṇaṃ pratilabhāmahe /

「信の薄い者」の梵文はhīna-adhi-muktikāḥで、hīnaは「見捨てられた、劣った」、adhiは「上に、大いに」、muktikāḥはmuc「解放する」に由来するmuktika「解放されたもの、解脱、解脱者」の複数形。adhimuktikaは「確信、深信、信の深い者」である。だからそれの「劣った」者は、劣った解脱者であり「信の薄い者」であり、小乗の解脱者、すなわち声聞や独覚（縁覚）をさすことになる。

4-18. そんなわたしたちが、世尊よ、ボサツ大士たちに対して、如来の知見についてのすぐれた法を説き、如来の知を、開き、説き、明らかにします。だのに、世尊よ、わたしたち自身は、それを望みはしないのです。というのは、如来はわたしたちの信を知り、巧みな方便をもちいられますが、わたしたちはわたしたちが世尊の実の息子であるという世尊の話を、知りもせず、覚りもしないからです。そこで世尊は、わたしたちが如来の知見の相続人であることを思い出させられます。というのは、わたしたちが如来の実の息子だといわれるからですが、しかもなお、わたしたちは信ずることが薄いのです。もし世尊が、わたしたちに信ずる力を認められるなら、ボサツの名を、世尊はわたしたちに与えられたでしょう。わたしたちは世尊から二つの意図を示されました。ボサツの前で信の薄い者と語られ、広大な仏の覚りに向かうよう勧められたことです。いま、世尊は、わたしたちに信ずる力のあることを認め、このことを宣言されたのです。このようなわけでわたしたちは、世尊よ、いうのです「欲もないわたしたちが、望まず、求めず、捜さず、顧いもしなかった、一切を知る者の宝を、如来の息子のように、おもいがけず手に入れた」と。

te vayaṃ bhagavan bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ tathāgata-jñāna-darśanaṃ ārabhyodāraṃ dharma-deśanāṃ kurmas tathāgata-jñānaṃ vivaraṃo darśayāma upadarśayāmo vayaṃ bhagavaṃs tato niḥspṛhāḥ samānāḥ / tat kasya hetoḥ / upāya-kauśalyena tathāgato 'smākam adhimuktiṃ prajānāti / tac ca vayaṃ na jānimo na budhyāmahe yad idaṃ bhagavataitarhi kathitaṃ yathā vayaṃ bhagavato bhūtāḥ putrā bhagavāṃś cāsmākaṃ smārayati tathāgata-jñāna-dāyādān / tat kasya hetoḥ / yathā 'pi nāma vayaṃ tathāgatasya bhūtāḥ putrā iti (W:putrāḥ) / api tu khalu punur (W:punar) hīnādhimuktāḥ / saced bhagavān asmākaṃ paśyed adhimukti-balaṃ bodhisattva-śabdaṃ bhagavān asmākam udahared (B:udāhareṭ) / vayaṃ punar bhagavatā dve kārye kārāpitā bodhisattvānāṃ cāgrato hīnādhimuktikā ity uktās te codārāyāṃ buddha-bodhau samādāpitāḥ / samākaṃ cedānīṃ bhagavān adhimukti-balaṃ jñātvedam udāhṛtavān anena vayaṃ bhagavan paryāyeṇaivaṃ vadāmaḥ / sahasaivāsmābhir niḥspṛhair anāśāṅkṣitam amārgitam aparyeṣitam acintitam aprārthitam sarva-jñatā-ratnaṃ pratilabdhaṃ yathā 'pīdaṃ tathāgatasya putraiḥ //

梵文では「adhimuktiと名づける第四章」、正本では「信楽品」、妙本では「信解品」の、長行、すなわち散文による説明の部分はこれでおわった。重頌、すなわちこれらの説明を韻文でくりかえす部分がこれに続くのを、次回から掲載する。

※前号正誤　一八頁　三行、五行　地蔵菩薩　→　僧形文殊菩薩

歌人・大塚五朗（二六）

1991 8 22　原田憲雄

安土行

一九四〇年（つづき）　五朗、四十三歳。

『水甕』昭和十五年九月号。

水にある夏

水路せまく舟をすすめて青々し葦より風は舟に寄りくる　安土　（庭苔　安土行五首）

すがしともわが見てありぬ扇もて水皺（みしわ）のてりをさけてゐるひと〈女〉（〃　〃　）

湖にむきて尿（いばり）を放つわらべあり湖岸の村の昼ぐもりつつ　（〃　〃　）

葦むらに青々と午後の日がありてかすかなるかな睦む鳰どり

信長もかくて見放（みさ）けし湖遠く茶碗を伏せし如き竹生島（ちくぶしま）（〃苔　〃　）

夏雲の起ち易くして日の午後はかげりかげらぬ湖の面　（〃　〃　）

この安土行については『京都風土記』の「河骨」がくわしく述べている。それによると、六月一日、「安土の摠見寺に小杉放庵の襖絵がある。かねがね小杉君から一度見ておいてくれといはれてゐたのであるが、御同行願ひたい」という誘いかけが、歌人のY氏からあり、「興亜奉公日」に、T氏、M氏を加えた四人で出かけたという。Yは吉井勇氏だが、TとMが誰なのか、「興亜奉公日」がいつなのかを、わたしは忘れてしまっている。

この号に「京都支社七月例会報」があり、二十三日午後七時からの京大楽友会館での歌会の詠草で五朗が「勢に乗りしとばかりはいはざらむヒットラー今日巴里に入る」といい、村田芳留子が「チロール風景を〈横光〉利一の旅愁によみゐつつ小説といふはいつはり多き」といっているのは、今から顧みると感慨を誘うものがある。

七月二十八日消印原田宛葉書に「夏の休みにはなつたけれど野球と講習とに追い立てられてゐます」とある。野球部の顧問で生徒の練習に立ち会わねばならず、入試のための補習講師にもあたっていたのであろう。八月二十三日消印の葉書に、

あはただしい旅です。しかしなかなか変化に富んだ旅です。横はまに三四日滞在、昨日は甲州に出て友人と一緒に富士山麓河口湖に遊びました。何しろ子供を連れてゐるので心に余悠がなくて歌もなかなかです。笛吹川で投網をうつたりして遊んだ愉快さは格別です　綺麗な富士を仰ぎ乍ら今日信州入り、富士見の奥約一里半、八ヶ岳の麓の立沢といふ所に来てゐます　高原らしい風物をながめて冷たい位の気温に心を遊ばせてゐます。

『水甕』同年十月号。

夏の植物園

噴水を吹き乱すほどの風はありて真昼ぐもりの疲れたる空　（庭六　植物園三首）

青葉の下白き道ありてパラソルが疲れて夏の遠景となる　（〃）

女学生のランデブーなどあはれにて映画のごとく遠く見てゐつ（〃）

咲くすでに散りそむる花の清しさを風の吹き寄るさるすべりの花

秋めきて幾日もあらね空遠く比叡は昼の雲を寄らせぬ

水甕京都支社の十月三日付の「御通知」（五朗筆）に「毎月五日に行つてゐました研究会、本月は防空演習中でもあり、且つ会場の都合もあり」歌会と一緒に楽友会館でする、とあり、五朗の同月八日消印原田宛葉書に、

…またまた少し買をやられて此頃は禁酒禁煙のわびしい生活をつづけてゐます、…月曜日と土曜日の晩は夜間中学で忙しいですが…

とあるが、それでも「そろそろ何かやりださなければと思ってゐます」ともいっている。

『水甕』同年十一月号。

秋　　意

風のある庭の朝日は涼しくてまだ定まらぬ松蝉の声　　（庭さ　黄槿二首）

夏すでに秋につづける日の光（かげ）や庭芝の上のかすかなるゆれ

大寺の昼の蟲りはすずしくて魚板の朱（あけ）にうごく木の影　　（〃　〃　）

うつしよはかくもさみしきみ墓べの秋粗草にゆるる日の光　　菟道稚郎陵墓

み墓べの松の木の間に遠見えて白き煙突秋空を截る

『水甕』同年十二月号。

拾　　遺

虹たちて何かはなやぐこの寺に（寺庭の）松四五本がひよろひよろとして　（続風土二三四　光悦寺）

蕭条と松の落葉の散る庭は昃りて照りて日の寒き昼　（庭七九　金閣寺）

山かげを出づればいまだ日のありて田中の道の寒き風晴れ

寺庭の邃（ふか）きに鳴けば春蝉の何とあはれなる昼の寂（しづ）けさ　（庭八一　嵯峨にて十首）

水涸れて見る目ひもじき池の面蓮のつぼみのまだかたくして

『水甕』昭和十六年一月号。

水ノ尾村　其他

一筋の径通はせて人住みぬはざまの村の秋の日のてり

一筋の径（みち）あり丹波（たには）に通ふといふ夕（夕べ）の空の虹のごとくに　（庭八三　水尾村四首）

日の晴れは（はれは）すでに秋づくおだやかさ谷をへだてて人のこゑする　（〃）

二こゑは二歳の鹿といふきけばかそけきかもよ山の気の冷え　（〃　水甕なし）

山陽（かげとも）と一日ひのある峡の村枇杷ほのぼのと花ならむとす

峡空をすでに傾く日の寒さ山かへてしばし鳥は鳴き顕（た）つ　（庭九五　柳生行五首）

おのづから草より湧ける夕風の河原に低し一筋の橋

このときの水尾行は、前年、森田曉平とともに訪れた時の話を聞いて、「ぜひわたしも」と頼んでいた水甕京都支社の前原利男を案内してのことであろう。

中野逍遥の手紙（四）

―春夢女史周辺　五―　1991 6 13　原田憲雄

『誰が罪』では、藤井倭文子の卒業の次の年に岡野一郎が倭文子を紀州に訪ねる話にしてあるが、中野逍遥が坪井すむを新宮に訪問したのは、すむの卒業の次の次の一八九三年だった。この夏、逍遥は帰省し「明治廿六年八月帰郷中」と題する詩を作った。「春夢思いを繋ぐ南紀の浦、秋琴涙を馳す東武州」「海天蒼茫望み極まりなく、月高し江城十二楼」の諸句がある。「十二楼」は前年七月かれが「春夢女史と別る」る詩にうたった「玉楼」と同じで、そしてそれは凌雲閣を指すのであろう。

同閣は一八九〇年十一月十三日、浅草千束町に十二階、日本最初のエレベーター付き遊覧所として開場したもの。《森》の引く『東洋経済雑誌』によれば、閣の高さは二百二十尺、一階から八階までは「イレベートル」で昇降させ、一度に十五人から二十人の客を運ぶ。八階には日本風の一室を設け、中に書画などを陳列し、休憩室にあてている。九階に登るには左右に階段があり、九階は美術品や楽器を備える。十階以上は中央に螺旋形の階段があり、十二階には望遠鏡がおかれ、関八州の山々から府内十五区の繁華を一目に見渡すことができる。同年十二月四日の『読売新聞』に凌雲閣の広告が出ていて「毎日午前九時よりエレベートル運転す。御婦人子供衆と雖も少しも驚くことなし。毎日曜日大祭日は閣上にて美妙の音楽を吹奏す。下足料はなし」という。一八九二年、東上したすむが帰国する日、逍遥は彼女を凌雲閣に案内し、ともに落日を眺めたのであろう。

さて、逍遥は一八九三年夏、新宮にすむを訪問した。『誰が罪』の第七、八、九回は、そのことをモデルにし

て描いたらしいが、かなり虚実がとりまぜてあるようだ。

《罪》では訪問を岡野の卒業の年の七月とするが、《中》では逍遥の卒業は一八九四年で、新宮訪問はその前一八九三年の八月の終か九月の初である。

《罪》では倭文子が岡野を案内したのは臥牛山だけだが、《中》では逍遥とすむは徐福の墓と那智の瀧を見物している。臥牛山について、新宮の若林芳樹大人が一九九一年二月十五日付の手紙で次のように教示された。

小説の中に、二人が散策する山が出て来ます。これは、新宮藩の丹鶴城址をモデルとしたものと存じます。この城は明治の始めとりこぼたれ、立派な石垣のそびえる城址となり、熊野川河畔に高く立っています。丹鶴城は一名沖見城といい、熊野灘・熊野川、その上流の五百重の山々、新宮市街が見渡されます。廃藩後は市民の憩いの場所、現在は市の公園です。臥牛山という雅名を春夢女史が用いました。新宮には城山とは別に臥龍山とか臥龍が丘という山がありました。今は削られて新宮市の官庁街となり、中央通りと名づけられています。蛇足ですが、臥龍が岡について申し述べます。城山から山続きで、海岸に併行に伸びた小さな山脈（恐らく何万年かまえの砂丘）があり、この山脈で町を新宮と熊野地（海側）とに分かっていました。蜂音庵略歴中「一年にして父上地を熊野地二番地に賜ふ」云々とあります、その熊野地です。長くのびたこの山の尾根の中ほどに巨松一本松があり、その他櫨（蝋を採るため藩主が植えさせた）、雑木、雑草、山の畑、段々畑、竹藪がある、草藪ともいうような丘です。勿論、門などありません。普通は永山（ながやま）と呼ばれていました。現在はこの山もなくなり、若い人々は知らなくなっています。……那智の瀧、徐福の墓を

単純化したのですか。

『誰が罪』でも『逍遥遺稿』でも、散策は二人だけのような書き方だが、徐福の墓、那智の瀧のいずれかには、すむの末弟の泰治が同伴したのではなかろうか。これについては後に触れる。とにかくこの散策の途中で『誰が罪』の描くままであったかどうかはともかく、悲劇のあったことを、次の逍遥の手紙が裏づける。

逢ふはしばしのあひだにてわかれてはいつ又
東のそらしのばせ玉ひなば　折々は文も
たまへかし　和歌のみち　つま琴
のしらべ　心をつけたまへ　家道　女子の道にもはげみ
玉へ　申上ぐるまでもなき事にしあれど
わかれの名残あまりの悲しさに
一筆かきのこし
まゐらせ候
重

すむ子様　重

コピーではよくわからぬが、これはたぶん巻紙で本文の部分を細くなかに畳みこみ、最後のところを封面として表書きし、結び文の形にした置き手紙で、逍遥が新宮を去る時、残したものであろう。

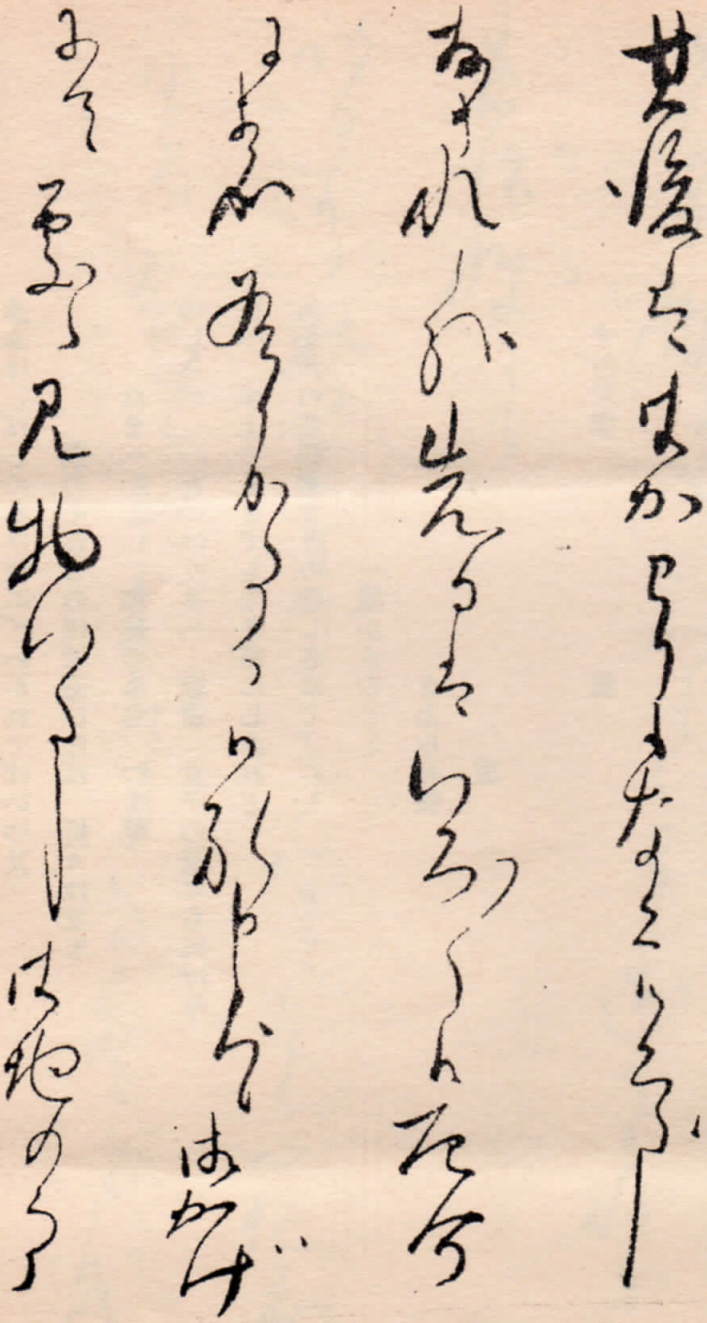
宛名が、これまでのような「春夢子様」でなく「すむ子様」とし、以後の現存する三通の宛名がいずれも「すむ子様」とあることは、逍遥のすむに対する心理的変化のあらわれとして注目すべきであろう。

中野逍遥の手紙（五）

―春夢女史周辺　六―　1991 6 14

原田憲雄

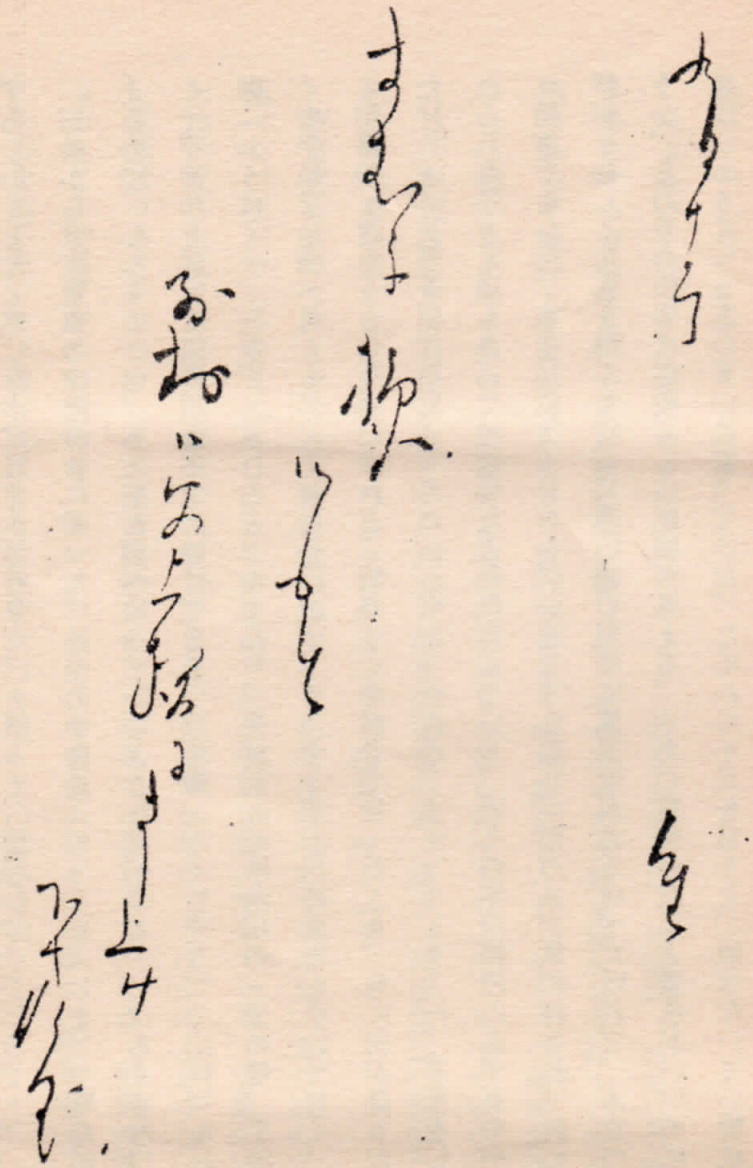
一八九三年夏、新宮に坪井すむを訪うた後、逍遥は「九月十二日」付で礼状を書いている。



其後は御かわりも
なく御くらし
なされ候哉先日は
いろ〻〻御厄介
に相成有りかたく
御礼申上候　御かげ
にて処々見物いたし候
御地の事

おもひ出る度に
御身のおもかげ
しのばれ申候
何とぞも一度東京
へ御出てなさるべき
やう　ねがひ申候　琴
はどうぞ　習ひ
なさるべく候　和歌も
同様　婦人には
めでたきわざと
存上候　尚ほ
何くれとなく御はげみ

なされ候やう身に
かへてねがひ入候御内
どなた様にもよろしく
御申述下され度
泰治様にも
昨日より稽古はじまり
何となく心忙敷
御座候　色々申上たき
事有之候得共
取いそき　右御礼まで
かしこ



九月十二日　　重

すむ子様
御もと

別封は父上様に
さし上け
下され度候

当時、泰治は八歳の少年である。ことさら名をあげ圏点まで付けているのは、単に可愛いかったという以外の何かの理由があったのではなかろうか、さきに推測した、逍遥・すむの散策に伴ったというような。すむの父への別封は、これまた礼状で、中に「紀州に遊び、坪井氏に投じ…」と題する詩が入っていたとも察せられる。

平等院・法界寺

1991 8 21　　原田　慶

娘といっしょに出かけることにした。「平等院へ行かへん？」とさそったら「行こうか」と同意したので、めずらしいことだと感じたが、以前から行きたいと思っていたらしい。

三条から京阪電車の宇治行きに乗った。途中の中書島（ちゅうしょじま）で電車が別の線路に入って方向を変えるので、いつもここで、もと来た方へ帰っているような気がする。しばらく宇治川に沿って走り、観月橋の近くで宇治川と別れて山科川を川上にむけて走る。六地蔵（ろくじぞう）で山科川をわたって木幡（こばた）、黄檗（おうばく）、三室戸（みむろど）をまわり、先に別れた宇治川の上流の傍、宇治駅に到着する。駅を出てすぐ右手に宇治橋が見えるが、そちらへ行かず、まっすぐ宇治川の東岸を歩いて行く。平等院の正面あたりにかかる朝霧橋を渡ろうとしたのだけれど、橋のすぐ手前まで行ったとき、急に雨が降りだした。それまでは晴れていたけれど、天気予報は所によってにわか雨だったのが、当たってしまった。写生をしていた中学生や、母親に連れられた子ども達もあわてて敷物などをたたんでいる。近くの宇治神社のあずまやや朱塗りの建物などにそれぞれ雨宿りをした。宇治川にカーテンを引いたような激しい雨の糸が風に押されて斜めになっている。小さな鳥の群がせわしく川面を飛んで行く。赤い橋の対岸に鳳凰堂があるはずだけれど、木立の中にみえる屋根がそうだろうか。その左の山手に学校らしい建物が見える。「あの建物がないと景色がいいのにねえ」とわたしが言うと、娘は「ふうん」とあいまいに笑っていた。なにかに不足を言うと、娘はたいてい賛成しない。「まあいいか」と

思って、わたしもそれ以上は言わない。

三十分近く待っても雨がやまないので、すこし雨足の弱くなった頃に、わたしの持っていた傘を開いて、二人で半分ずつ肩を濡らしながら朝霧橋を渡った。宇治川の水は琵琶湖から流れてくるので、いつも青々している。雨が降って橋の上は風も強いので、急いで渡り、中の島を歩いて、もう一つ橋橋を渡ると平等院はすぐだった。やっと雨があがってきて、門を入る頃にはかなり小降りになっていた。入ってすぐに扇の芝というのがある。ここは、源頼政の自刃した跡だといわれる。後白河法皇の第二皇子、高倉宮以仁親王の命を奉じて、平家討伐のために平知盛と戦って敗れた。そのとき頼政は七十六歳だったという。

観音堂に入って拝んでから、鳳凰堂へ向かう。先に池をへだてた向かい側の岸に立って、全体の姿を見たいと思った。雨がやんで薄日の射しはじめたなか、木の枝から滴が落ちてくる。正面に立って、中堂の格子の丸窓からはっきりと見える阿弥陀如来のお顔を拝んだ。雨あがりなので、ほかに人がいない。

鳳凰堂はあまり例のない不思議な建物である。写真では親しんでいたが、屋根の線の、胸を張ったような何とも言えない曲線、左右の翼廊のバランスのよさ、モザイクのような細かい柱や欄干、こんなに現実離れのした美しい形を誰が設計し、誰が根気よく組み立てたのだろう。翼廊のなかはどうなっているのかと、以前から興味をもっていたが、実用的な意味はまったく無く、中堂のもつ重量感を左右にそらし、全体のバランスのなかで、軽快さと、優美さとを生み出すのに大きな役割を果たしていると説明してあった。尾廊も同じように土間だったのを、後の時代に改修して、板敷きにしたのだそうである。

平等院は、源融の別荘として開かれ、宇多天皇の別荘となり、その孫にあたる源重信の没後、藤原道長が譲り受けたのだという。たいへん広い土地を占めていたらしくて、道長の没後二十五年目の永承七年（一〇五二）に長男の頼通が寺院に改めて平等院と名づけた。亡くなるまでの二十年間に、大日如来を本尊とする本堂、阿弥陀堂、法華堂、多宝塔、五大堂など多くの建物ができ、壮麗な大寺院となったという。後にいくたびも戦乱に遭い、鳳凰堂のほかは、みんな焼けてしまったのだけれど、よくこの美しい建物が残ったことだと思う。いま、わたし達の立っているところには小御所があったといわれ、頼通も朝夕に阿弥陀如来を拝し、朝の光、沈む夕陽のなかの、美しい阿弥陀堂を見ながら、極楽浄土に往生することを願っていたのであろう。池は静かに空を映し、さきほど降った雨のせいかすこし濁っていた。中堂の正面に石燈籠が一基立っている。夕方、沈む太陽を背にして影のような堂内に灯が入ると、阿弥陀如来のお顔が浮かび上がり、燈籠が池に映る。それをずうっと空中に展開してゆくと、無限の広がりをもって阿弥陀浄土が現出するのだと聞いたことがある。観無量寿経というお経のなかに、西方極楽浄土を見る方法が説かれていて、それを観想というそうだけれど、第一が日想観。日没の太陽に向かって心を正し、一心に思いをかけて、気持を散らすことなく、太陽が没してゆくありさまを見る。太陽が没したあとは、目を閉じても開けても、明瞭に眼前にありありと思い浮かべられるようにする。このことをラジオで聞いた頃、わたしは京都駅の陸橋の窓から真赤な太陽が沈むのを見た。立ち止まって一心に見つめたけれど、日想観はできなかった。ほんとうに熱心に浄土を見たいと願わなければ駄目なのだと思った。第二が水想観。あとに宝地観、宝樹観、宝池観、宝楼観、華座観、像想観とつづく。よくわからないけれどこれらの文字から考えても、

鳳凰堂は観想を助けるように造られている。夕陽の沈む頃ここに立ったら、現代のわたし達にも極楽浄土を感じることができるかもしれない。

池をまわって塔頭寺院の不動尊や頼政公の墓所にお参りしてから、いよいよ鳳凰堂のなかへ入った。まず仰ぐ阿弥陀如来は、あまりにも近づきすぎて、何となく恐ろしい。こんなにすぐ傍まで踏み込んでしまっていいのだろうかという気がする。はっきりと開かれた目、けっしてゆるがない決意、わたし達の気づかないことを見とおして、かならず最後まで捨てずに救おうとする強い意志が感じられて、とても居たたまれない気がする。わたしの横に来たひとが、何か言ったのでそちらを見ると、小さい写真を握っていた。まだ色鮮やかな若い女のひとの写真なのに、握りしめたように皺になっていた。

「去年は娘といっしょにここに来たのに、死んでしもたんです。交通事故で。二十歳でしたけど。ほんでこの写真を持って、こうしていっしょに来てますんやわ」

それだけ言うと、わたしの返事を待たずに、涙のこぼれるのを見られまいとするように、そのひとは、さっとお堂の外へ出ていった。わたしもすぐ二十歳になる娘をさそって来ていただけに驚いて、そのひとの行った方を振り返った。誰かといっしょだったようで、気持を変えようとしてか、早口に何か言っているのが見えた。わたしはどうもこのお堂のなかにいると、他人の心のなかに土足で入ったようなたまらないものがあって、まわりをよく見ないで出てきてしまった。それでも光背と天蓋の美しさ、雲中供養仏の姿は見てきたようだ。娘に「どうやった」とたずねたら、阿弥陀さんがこわかったと言い、「わたしは、どっちかというと主役より脇役が気にな

るんやわ」と言ったから、雲中供養仏のほうをよく見ていたらしい。この阿弥陀如来を彫った定朝とはどんな人だったのだろうか。かれは生涯に、三千躰を超える仏像を造ったと考えられるそうだけれど、阿弥陀如来では、はっきり定朝作として知られるのは平等院のこの一躰だけだという。

平等院を出る頃にはすっかり晴れて暑い日盛りだった。宇治茶を売る店の多い町並を通って宇治橋を渡り、京阪電車で六地蔵まで引き返して、法界寺へ向かった。日野行きのバスはなかったのでタクシーに乗ったが、十五分ほどで着いた。寺の門を通り越したので、法界寺へ行くことを告げると、「ここから入ってください」といって、角を曲がった所で止まった。寺は開放的で、門を通らなくても入れるのだった。生け垣の間に細い道があって、すぐに大きな池があり、その横を通って庭に入る。美しい姿の方形のお堂が見え、桧皮葺きの屋根に宝珠が乗っている。山里のようなおおらかさと、どこか品格のよさが感じられた。まったく人の姿がないのでいくらか不安でもあったが、庫裡の方に行ってみると法界寺についてのパンフレットが積んであり、受付のような窓があった。ほっとして声を掛けたけれど返事がない。娘が入り口に行って「こんにちわ、すみませえん」と大きな声を出すと、やっと若い女のひとが出て来られた。「じきに開けますので、ちょっと待っていてください」とのことで、待っている間に、戸の開いているお堂へ行ってみると、ここが法界寺の本堂で、薬師如来がおられるのだった。後で説明を聞いたところによると、天台宗の宗祖、最澄が自ら刻んだ三寸の木像で、秘仏である。日野薬師と呼ばれて、いまも信者が多いという。お堂は、明治三十七年に奈良から移築されたもので、室町時代の建物だそうである。

なおしばらく待っていると、寺の婦人らしい小柄なお婆さんが来て、阿弥陀堂の戸を開けてくださった。西側の前寄りの木戸を一枚だけ開けてもらって入り、ほの暗いお堂のなかで、阿弥陀如来の前に座って、わたし達が手を合わせていると、奥の両横の戸を一枚ずつ開けられたので、堂内が明るくなって、お顔がよく見えるようになった。ずいぶんやさしいお顔だと思った。目はほとんど閉じられて細く、頬がふっくらとして口もとが小さく、このあたりは童顔と見まごうばかりである。しかし目から額にかけてはきびしさがただよう。法金剛院の弥陀ともまた違うお顔だった。

案内のひとは、どこからか懐中電燈を持ってきて、光を当てながらこまかく説明された。「目は閉じておられるように見えますけど。細うく、うっすらと開けておられるのですよ、ね」とそのあたりに光を向けて言われたが、わたしの座っている位置からは、どうしても閉じておられるように見えた。暗くて見えなかった内陣の上部も、格天井の中、そのまわりの小壁の内外すべてに飛天や、楽器、花などが描かれていた。奈良法隆寺の壁画が焼失したので、いまでは、古い壁画の残っているのはここだけだということだった。内陣の四隅の柱にも仏像が描かれている。木に麻布を張り、漆喰を塗って、その上に、金剛界の尊像が四面四段十六尊ずつ、四本だから六十四尊、描かれているのだという。ほとんど擦り切れて、はっきりわかるのは少ない。「こうしてさわるところは、はげ落ちて、ようわかりませんけど、ほら、ここを見たらわかるでしょ、麻の布の貼ってあるのも見えますわ」と教えられる。「まあ、ゆっくりご覧になってください」といって戸口の方にしりぞかれる。

わたし達は、阿弥陀如来のまわりをぐるっと廻って、もういちど前にすわってよく拝んだ。平等院より外陣が

ずっと広くとってあるので、お顔を仰ぐ角度がゆるやかだから、全体像がよく見えて、落ちついて座っていられる。仏像のお顔がこんなにも一躰ずつ違うのだということに、あらためて驚いた。

お礼を言って、わたし達が外へ出ると、お堂はふたたび、ぴたりと閉ざされてしまった。

法界寺は、日野資業によって永承六年(一〇五一)頃、平等院と前後して建てられている。昔、木幡に藤原一族の墓地があり、道長によって浄妙寺が営まれたので、藤原一族の日野流に属する資業は、頼通に所領を分けてもらって法界寺を建てたのだそうである。最も盛んだった頃には、この寺に少なくとも五躰の阿弥陀如来が安置され、同じ藤原に属する、日野流・中御門流の貴族の發願による多くの堂塔が立ち並んでいたことが、古い記録によってわかっているという。かれらは、病人が出ると祈願のためにお参りし、方違えなどにも使うため宿所や山荘も営み、境内の北は醍醐寺に隣接していたそうである。

すべて戦火に焼失して衰えたが、現在の阿弥陀堂は、嘉禄二年(一二二六)頃、藤原通憲(信西入道)の孫で、法然の弟子であった聖覚によって復興されたものであるという。親鸞上人も日野流の人であるといわれ、法界寺の隣に誕生院があり、えな塚や、うぶ湯井戸もある。日野の里は、いまもゆったりと奥ゆかしさの感じられる土地であった。

この夏は、法金剛院から、平等院、法界寺の三つの阿弥陀如来を拝むことができて幸せだった。どこへ行っても、人々の心のありようが身に感じられた。これは写真やテレビで見ているのとは違う何か、自分だけのものではない、たくさんの人の心が、よどみのようなものになって感じられる。それが大切なのだと思った。